

知的障害者の老後に対する親達の不安に関する調査

三原 博光*1 松本 耕二*2 豊山 大和*3

*1 県立広島大学保健福祉学部人間福祉学科

*2 山口県立大学社会福祉学部

*3 近畿福祉大学

2006年 9月12日受付

2006年12月12日受理

抄 録

本研究の目的は、アンケート調査を通して、知的障害者の老後に対する親達の不安を明確にすることであった。その結果、368名の親達などから回答が得られた。現段階では、この知的障害者達の年齢は、多くが20歳代から30歳代までであり、まだ高齢の年齢に達していなかったが、大部分の親達は、将来の子どもの老後について不安を抱えていた。不安の理由としては、親自身が高齢となり、主に知的障害者の世話が困難であることがあげられていた。しかし、高齢知的障害者の世話については、多くの親達はきょうだいには期待をしていなかった。

親達が期待する高齢知的障害者の生活場所や人生の終焉場所は、主に「現在生活をしている場所」「自宅」、
「グループホーム」であった。親達は、子ども達の住み慣れた生活環境で人生を終えることを望んでいるようである。

キーワード：知的障害者、高齢化、親達、老後、介護

I はじめに

2000年に介護保険法が施行され、様々な施設・在宅福祉サービスが高齢者に提供され、社会全体に高齢者の介護に対する関心や興味が高まってきた。ところが、ある知的障害者入所更生施設では、入所している高齢の知的障害者の支援問題で悩んでいた。それは、高齢となり、排泄や入浴などの日常生活の介助が必要となった利用者をこのまま更生施設で支援をするのか、あるいは十分な介護サービスが提供される特別養護老人ホームに入所するのかといった問題であった。なぜならば、過去、この施設では、ある一人の高齢の知的障害者が特別養護老人ホームに入所したが、周囲の人々と十分な言語的コミュニケーションが取れず、そこで孤立した生活を送っていたことと、一方、今の施設の現状では、高齢の知的障害者に対する不十分な支援体制であったからである。不十分な支援体制とは、高齢知的障害者の介護に対する専門的職員の不在、高齢化に伴う疾病への医療的設備の不備、彼らへの不十分な余暇指導である。そして、高齢知的障害者の支援問題は、特定の知的障害者施設のみならず全国の知的障害者施設が抱える問題となっていることが報告されている^{1)~5)}。このような状況で、知的障害者の老後に対する親達の不安の状況を明確にし、何らかの福祉対策の検討が必要であるのではないかと考えた。なぜならば、知的障害者の老後の介護に強く不安を持っているのが、長年、知的障害者を養育してきた親達自身であると思われたからである。また、これまでの先行研究にみられる障害者の親達に対する調査研究では、親達の障害児の育児についてのストレスや夫婦関係の問題を取り上げたものが中心であり^{6)~10)}、知的障害の子どもの老後の不安を取り上げたものはなかったことも本研究を取り上げた1つの要因である。

以上の様な経緯から、本研究の目的は、アンケート調査を通して、知的障害者の老後に対する親達の不安を具体的に明らかにすることであった。そして、親達の子どもの老後の不安を把握し、それを施設などの支援に反映することは高齢の知的障害者のみならず、障害者家族全体に対する支援になるのではないかと考えたのである。そこで、筆者達とかわりのある山口市内と西宮市・福岡市内の知的障害者の親達に対して知的障害者の高齢化問題についてアンケート調査を実施したので、その結果を報告する。

II 研究方法

1 調査対象者

山口市内の知的障害者通所授産施設、入所更生施設および西宮市・福岡市の知的障害者育成会に関わる知的障害者の親達を調査対象者とした。本調査は、回答

者と知的障害者自身のプライバシーに関する事柄とも関係していることから、アンケート調査の受諾して頂けた団体を通して実施した。

2 調査時期

2004年4月から2006年2月までであった。

3 調査方法

質問紙によるアンケート調査を採用した。調査は、アンケート調査実施の承諾を頂いた団体の代表者を通して、その親達に質問紙を配布した。回収には各団体への留め置きと郵送法の併用で行った。

4 調査内容

質問紙の内容は以下の通りである。

(1) 知的障害者の老後について

- ①子ども達の老後に対して不安があるか?
- ②ある場合、その理由は何か?

(2) 知的障害者の高齢についての印象(身体的、心理的側面)

- ①子ども達が年老いたと思うか?
- ②思う場合、その理由は何か?、また、現在の必要とされる介護状況。

(3) 知的障害者自身の高齢(加齢)についての認識

- ①子ども自身、高齢(加齢)になることを理解していると思うか。
- ②思う場合、その理由は何か?

(4) きょうだいによる知的障害者の介護について

- ①きょうだいに高齢の知的障害者の介護を期待するか?
- ②期待する場合、その事を言葉で伝えているか?

(5) 職場での定年制の導入について

- ①将来、授産施設などにおいても定年制の導入が必要であると思うか?
- ②必要ではない場合、その理由は?

(6) 高齢知的障害者の生活場所

- ①高齢知的障害者は、どこの生活場所が望ましいのか?
- ②高齢知的障害者の人生の終焉場所

以上、アンケートの質問項目数は合計22であり、回答は選択肢を用いた。ただ、最後に本アンケートに関する自由記述の解答欄を設定した。アンケートは、親達の精神的負担にならないように回答が容易な質問を考え、筆者達が独自に作成したものである。そして、主に親達の子どもの加齢の印象、親亡き後の子ども達の老後の支援体制、親達の願う子どもの老後生活場所を調べることを中心に質問を作成した。

5 データの分析

調査結果については、まず、データの単純集計をし、その後、一部の質問項目の回答結果と親達の年齢(60歳未満・60歳以上)、知的障害者の年齢(40歳未

満・40歳以上)、知的障害者の日中の生活場所(在宅及び通所施設・入所施設)障害の程度(軽度・中度・重度)による関係を統計的に調べた。使用した統計ソフトはSPSSvir.14.0である。

Ⅲ 調査結果

表1 老後不安

	n	%
非常に不安である	237	65.3
まあまあ不安である	99	27.2
あまり不安がない	14	3.8
ほとんど不安がない	5	1.3
わからない	8	2.2
計	363	100.0

表2 不安理由

	n	%
親自身が高齢となり、知的障害者の世話が困難	148	45.3
知的障害者のための老人ホームがない	103	31.5
親以外の家族や親類が世話してくれない	23	7.0
経済的苦しい	9	2.8
その他	44	13.4
計	327	100.0

表3 子どもの加齢感

	n	%
よくある	52	14.4
時々ある	108	30.0
あまりない	149	41.4
ほとんどない	51	14.2
計	360	100.0

表4 加齢感理由

	n	%
物忘れが多くなった	12	7.9
歩行が困難になった	15	9.9
視力が衰えた	8	5.3
耳が聞こえにくくなった	4	2.6
忍耐力がなくなった	19	12.5
食欲がなくなった	2	1.3
トイレでの助けが多くなった	54	35.5
白髪やしわが増えた	37	24.3
その他	1	0.7
計	152	100.0

表5 必要介護項目(複数回答)

	n	%
移動等について 寝返り、歩行、移動など	25	7.6
身体の洗身について	49	15.0
食事摂取について	21	6.4
排便 排尿について	47	14.4
はみがき、洗顔、整髪等について	54	16.5
衣服の着脱	30	9.2
問題行動への対応 被害的、感情が不安定、暴言暴行など	49	15.0
今の所、介護の必要はない	51	15.6
その他	1	0.3
計	327	100.0

表6 加齢理解(本人)

	n	%
思う	63	17.6
思わない	156	43.5
わからない	140	38.9
計	359	100.0

表7 加齢理解理由

	n	%
自分の身体の衰えについて話をする	16	26.2
自分の死の問題について話をする	4	6.6
親の死の問題について話をする	20	32.8
その他	21	34.4
計	61	100.0

表8 きょうだいの介護の期待

	n	%
非常に期待する	25	8.0
まあ期待する	66	21.0
あまり期待しない	111	35.3
ほとんど期待しない	112	35.7
計	314	100.0

表9 言葉による世話期待の伝達

	n	%
よく伝える	16	16.5
時々伝える	48	49.5
あまり伝えない	19	19.6
ほとんど伝えない	14	14.4
計	97	100.0

表10 定年制導入

	n	%
非常に必要である	10	5.7
まあまあ必要である	31	17.3
あまり必要ではない	47	26.2
わからない	91	50.8
計	179	100.0

表11 高齢時希望生活場所

	n	%
病院	9	2.7
特別養護老人ホーム	76	23.8
現在生活している施設	103	32.2
グループホーム	80	25.0
自宅	52	16.3
計	320	100.0

表12 終焉希望場所

	n	%
病院	35	11.4
特別養護老人ホーム	62	20.3
現在生活している施設	77	25.2
グループホーム	52	17.0
在宅	80	26.1
計	306	100.0

表13 分散分析結果一覧

項目		老後の不安 1)				子どもの加齢感 2)				きょうだいへの期待 3)				期待の伝達 4)				
		平均値	s.d.	F値	p.	平均値	s.d.	F値	p.	平均値	s.d.	F値	p.	平均値	s.d.	F値	p.	
両親の年齢	60歳未満	1.48	0.65	6.66 **	2.82	0.83	43.38 ***		3.12	0.86	7.99 **		2.33	0.95	0.14 n.s.			
	60歳以上	1.30	0.60		2.22	0.89			2.82	1.00			2.31	0.90				
障害児の年齢	40歳未満	1.39	0.62	0.62 n.s.	2.71	0.88	30.75 ***		3.05	0.90	6.25 *		2.43	0.90	5.72 *			
	40歳以上	1.32	0.60		2.02	0.83			2.68	1.02			1.91	0.81				
障害の程度	軽度	1.76	1.06	6.15 **	2.84	0.85	1.78 n.s.		2.86	0.99	1.91 n.s.		2.82	0.75	2.07 n.s.			
	中度	1.40	0.59		2.51	0.98			2.82	1.04			2.36	0.98				
	重度	1.35	0.56		2.54	0.88			3.06	0.89			2.21	0.90				
生活場所	自宅	1.41	0.63	1.74 n.s.	2.64	0.86	7.68 **		3.05	0.91	2.33 n.s.		2.30	0.89	0.01 n.s.			
	施設	1.31	0.60		2.35	0.91			2.86	0.98			2.32	0.90				
居住地	都市部	1.40	0.59	0.01 n.s.	2.54	0.91	0.11 n.s.		3.03	0.88	1.08 n.s.		2.36	0.86	0.23 n.s.			
	地方	1.40	0.71		2.57	0.91			2.92	1.02			2.26	1.00				

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

1) 1.非常に不安~4.ほとんど不安はない 2) 1.よくある~4.ほとんどない 3) 1.非常に期待~4.ほとんど期待はない 4) 1.よくある~4.ほとんどない

※質問項目によっては記入漏れがあったので、回答結果の総数が368名にならない場合もある。本来、きょうだいや祖父などは対象者から除去すべきであったが、親達が死亡をしている場合もあり、これらの人々が親達の代わりになると考えられるので、調査対象者に含めることにした。また、知的障害者の数や障害の種類においても、記入漏れがあったので、知的障害者の総数が368名にはならない点も付け加えておく。

基本的属性：アンケート調査では、368名の親達などから有効な回答が得られた。記入者の内訳は、母親302名(82.1%)、父親31名(8.4%)、きょうだい31名(8.4%)、祖父3名(0.8%)であり、大部分は養育の中心である母親が記入していた※。

親達の年齢は、40歳代49名(13.3%)、50歳代140名(38.0%)、60歳代以上168名(45.7%)であり、8割以上の親達が50歳代以上であった。

知的障害者の年齢は、20歳代129名(38.2%)、30歳代127名(37.6%)、40歳代45名(13.3%)、50歳代6名(1.8%)、60歳代9名(2.7%)であり、大部分の知的障害者達は、20-30歳代であり、まだ高齢の年齢状況に達していなかった。したがって、親達は、今、即座にわが子の高齢化の問題には、切羽詰まった状況にはないかもしれないが、本論文では、将来、必ず訪れるわが子の高齢化についての親達の現段階の意識について触れることにした。また、知的障害者の場合、45歳ぐらいで早期の高齢化を迎える場合もあるので、既に早期高齢化を迎えた知的障害者もいると想像される。一方、知的障害者の年齢が50歳代以上の高齢化になると、親達の多くは既に亡くなっており、親達に対するアンケートの実施が困難であることも事実である。

障害の種別は、主に知的障害が252名(72.6%)、自閉症48名(13.8%)、肢体不自由児15名(4.3%)であった。障害の程度については、重度249名(69.2%)、中度78名(21.7%)、軽度33名(9.2%)であった。知的障害者の順位は、第1子が172名(49.4%)、第2子123名(35.3%)、第3子44名(12.6%)であり、半数近くは第1子であった。

知的障害者の日中の生活場所は、通所授産施設が158名(43.5%)、通所更生施設34名(9.4%)、入所更生施設79名(21.8%)、入所授産施設25名(6.8%)、自宅20名(5.5%)であり、多くの知的障害者は、家族と同居しながら施設へ通っていた。

以下、質問に対する回答結果の単純集計と一部の質問項目の回答結果と親達の年齢、知的障害者の年齢、知的障害者の日中の生活場所、障害の程度(軽度・中度・重度)による関係を統計的に調べたものである。表1-12に単純集計の結果、表13に分散分析の結果一覧が示されている(表1-12、表13参照)。

(1) 知的障害者の老後について

①子ども達の老後に対して不安があるか？(表1)

「非常に不安である」と「まあまあ不安である」と回答したものが336名(92.5%)であり、ほとんどの親達がわが子の老後に不安を感じていた。そして、親達の年齢($F = 6.66, p < .01$)、子どもの障害の程度($F = 6.15, p < .01$)により、不安の有意差がみられた。

②不安が「ある」理由(表2)

「親自身が高齢となり、知的障害者の世話が困難」と回答したものが148名(45.3%)、「知的障害者のための老人ホームがない」103名(31.5%)であった。「経済的に苦しい」はわずか9名(2.8%)であった。特に「親自身が高齢となり知的障害者の世話が困難」の回答においては、重度知的障害者と軽度知的障害者の親達に有意な差がみられた($F = 5.169, df p < .01$)。

(2) 知的障害者の高齢の印象(子どもの加齢感)

①子ども達が年老いたと思うか？(表3)

「よくある」と「時々ある」が160名(44.4%)、「あまりない」と「ほとんどない」が200名(55.6%)で、加齢をあまり感じていない親達の割合が多かった。この質問項目の回答結果と親達の年齢($F = 43.38, p < .001$)、知的障害者の年齢($F = 30.75, p < .001$)、障害者の日中の生活場所($F = 7.68, p < .01$)において有意差が示された。

②「思う」場合、その理由は何か？(表4)

「思う」と回答した160名のなかで、「トイレでの助けが多くなった」54名(35.5%)が最も多く、次いで「白髪やしわが増えた」37名(24.3%)、「忍耐力がなくなった」19名(12.5%)であった。そして、「トイレでの助けが多くなった」の理由については、親達の年齢($F = 4.91, p < .05$)、知的障害者の年齢($F = 6.08, p < .05$)、障害の程度($F = 3.09, p < .05$)において有意差がみられた。

また、現在の必要とされる介護項目は、「はみがき、洗顔、整髪等について」54名(16.5%)、「身体の洗身について」49名(15.0%)、「問題行動への対応」49名(15.0%)であり、身体的な介護の必要性が最も多かった(表5)。

(3) 知的障害者自身の高齢(加齢)の認識状況

①子ども自身、高齢(加齢)になることを理解していると思うか？(表6)

「思う」63名(17.6%)、「思わない」156名(43.5%)、「分からない」140名(38.9%)と回答し、多くの親達は、知的障害者自身が加齢を理解しているとはあまり感じていないようである。この「思う」という回答のなかで、親達の年齢($F = 15.55, p < .001$)、知的障害者の年齢($F = 28.11, p < .001$)、障害の程度($F = 5.63, p < .01$)、居住地($F = 7.84, p < .01$)において有意差が見られた。

②思う場合、その理由は何か？(表7)

「思う」と回答した61名のうち、その理由に「親の死の問題について話をする」20名(32.8%)、「自分の身体の衰えについて話をする」16名(26.2%)であった。

(4) きょうだいによる知的障害者の介護について

①きょうだいに高齢の知的障害者の介護を期待するか? (表8)

「非常に期待する」と「まあ期待する」が91名(29.0%),「あまり期待しない」と「ほとんど期待しない」223名(71.0%)であった。7割強の親達が、きょうだいに知的障害者の介護を期待していなかった。ただ、「期待する」と回答したなかで、親達の年齢($F=7.99, p<.01$), 知的障害者の年齢($F=6.25, p<.05$)において有意差がみられた。

②期待する場合、その事を言葉で伝えているか? (表9)

「期待する」と回答した91名の親達のなかで、きょうだいに障害者の介護を期待することを言葉で「伝える」もの64名(66.0%),「伝えない」もの33名(34.0%)であり、半数以上の親達は言葉で介護の期待をきょうだいに伝えていた。「期待」の伝達においては、知的障害者の年齢($F=5.72, p<.05$)において、有意差が見られた。

(5) 職場での定年制の導入について

①将来、授産施設などにおいても定年制の導入が必要であると思うか? (表10)

「非常に必要である」と「まあ必要である」が41名(23.0%),「あまり必要ではない」47名(26.2%),「わからない」91名(50.8%)と回答し、半数は分からないと回答していた。定年制の導入については、親達の年齢他、どのような要因においても有意差が見られなかった。

②必要ではない場合、その理由は?

「年齢だけで判断するべきではない」、「働ける間は働く必要がある」、「働く場所がなくなると困る」などが多く挙げられていた。

(6) 高齢知的障害者の生活場所

①高齢知的障害者は、どこの生活場所が望ましいのか? (表11)

「現在生活している施設」103名(32.2%),「グループホーム」80名(25.0%),「特別養護老人ホーム」76名(23.8%),「自宅」52名(16.3%),「病院」9名(2.7%)であった。そして、「現在生活している施設」の回答のなかで、親達の年齢($F=14.96, p<.001$), 知的障害者の年齢($F=10.3, p<.001$), 知的障害者の日中場所($F=166.80, p<.001$), 居住地($F=59.90, p<.001$)の様々な要因において有意差がみられた。

②高齢知的障害者の人生の終焉場所 (表12)

「自宅」80名(26.1%),「現在生活している施設」77名(25.2%),「特別養護老人ホーム」62名(20.3%),「グループホーム」52名(17.0%),「病院」35名(11.4%)であり、終焉場所に「自宅」や「現在生活している施設」と回

答したものが多く見られた。知的障害者の終焉場所においても、「現在生活している施設」の回答のなかで、親達の年齢($F=7.75, p<.01$), 知的障害者の年齢($F=5.01, p<.05$), 知的障害者の日中場所($F=127.64, p<.001$), 居住地($F=55.71, p<.001$)の様々な要因において有意差がみられた。

IV 考察

本調査結果により、知的障害の子どもへの老後に対する親達の不安の状況が明らかにされたと思われる。それによると、子ども達の年齢の多くは20歳—30歳代であったが、親達の大部分は子ども達の将来の老後に不安を抱えていた。しかも、親達の年齢が高くなり、子どもの障害の程度が重くなると、親達は子どもの老後に強く不安を感じる傾向が見られた。つまり、親達は高齢になり、子どもの障害の程度が重くなると、体力的、精神的にも子どもの介護に不安を持つと思われる。そのことは、不安の主な理由として「親自身が高齢となり、知的障害者の世話が困難である」があげられ、しかも、この理由において障害の程度において有意差がみられたことから、そのことが理解できよう。したがって、福祉関係者は、知的障害の子どもが重度で、かつ高齢になってきた親達に対しては、彼らの不安を認識した上でのかかわりが必要とされよう。

知的障害者の加齢の印象は、半数以上の親が年老いたと感じていなかった。これは、知的障害者の約75%が20歳—39歳であったことも回答結果に影響を及ぼしているのかもしれない。親達はわが子の将来の老後生活不安を感じながらも、現時点では子どもの加齢感は薄いようである。ただ、子どもの加齢感と親達の年齢、知的障害者の年齢、障害者の日中の生活場所において有意差が示された。すなわち、親達と知的障害者の年齢が高くなると、親達は子どもの加齢を感じるのであり、また、毎日、子ども達と接している在宅及び通所施設の親達が加齢を感じていたのである。障害者の加齢については、一般の人々の加齢と変わらないとする報告もあるが²⁾、他方、知的障害者施設の現場では65歳未満であったとしても、身体的な加齢が早く進むケースもあり、そのような場合、特別養護老人ホームへ入所した方が良いとする報告もある¹¹⁾。したがって、親達の知的障害者の加齢感においては、年齢、障害、居住場所の様々な要因にも影響を受けているため、高齢の知的障害者の支援については、年齢だけの基準とした対応ではなく、やはり個別の状況に応じて考えるべきであろう。このことは、本調査のなかでも、わが子の加齢を感じている親達は、その理由として「トイレでの助けが多くなった」「歩行が困難になった」をあげ、また、現在必要とされている主な

介護状況が身体的介護（はみがき、洗顔、整備等）であることから、知的障害者の年齢が20歳-39歳であったとしても、一部の親達は、わが子の老化が早く進んでいると感じていることから理解できよう。

次に、知的障害者本人の加齢の認識について、多くの親達は知的障害者自身が高齢を認識しているとは思ってはいなかった。ただ、認識している回答とした一部の親達のなかで、親達や知的障害者の年齢が高くなり、障害の程度が軽くなると、子ども自身が加齢を感じているものもいた。つまり、親達は知的障害者本人も障害が軽度になると、加齢の状況が理解できているのである。そして、知的障害者が加齢を感じている理由として、主に「親の死の問題について話をする」「自分の身体の衰えについて話をする」と挙げられていた。つまり、知的障害者自身が高齢化（加齢）を理解したと推察する一つの要因は「死」や「衰え」の会話であることから、この点が、彼等の高齢についての認識理解の条件になるのではないかと考えられる。そして、特に知的障害者自身の生活のなかで「親」の存在は非常に大きく、親に対する死や高齢についての会話は、知的障害者自身が高齢になることを認識する重要な判断材料の一つになるのではないと思われる。また、知的障害者のなかには、親達の死のみならず、仲間の死を理解し、死そのものを認識していると報告されている¹²⁾、¹³⁾。したがって、福祉関係者や親達にとって、高齢を認識し、死の問題について理解ができる高齢の知的障害者に対しては、両親の死のみならず、本人の死についても語り合い、彼らと共にターミナルケアについて考えて行くことも1つの福祉的援助の課題になるのではないと思われる。

親達の多くは、きょうだいに知的障害者の介護を期待していなかった。しかし、一方、親亡き後の知的障害者の世話について、きょうだいに期待したいとする親もあり、明確な傾向が示されなかったとする報告も存在する¹⁴⁾。特に本調査のなかでも、「期待する」と回答した親達は、親達と知的障害の子どもの年齢が高くなると、きょうだいに知的障害者の介護を期待する傾向が見られた。いずれにせよ、親達は、内心きょうだいに知的障害者の介護を期待したいと思ったとしても、長年、知的障害者の養育で苦勞してきた経験を考えると、きょうだいに知的障害者の介護を期待することを躊躇してしまうのだろう。したがって、福祉関係者は、知的障害者の介護についてきょうだいに負担を感じさせないようなサポート・システムを考えて行く必要がある。具体的には、高齢の知的障害者の家族に対するホームヘルプサービスやデイサービスを充実させて行くべきであると考えられる。

職場での定年制の導入については、半数以上が分からないと回答をし、この点に関して、多くの親達は、あまり考えていないようであった。この回答結果には、

調査対象者のなかに、更生施設利用者などの親達が含まれていたことも影響を及ぼしているのではないと思われる。ただ、親達の意識のなかに、知的障害者が授産施設に通ったとしても、彼らがそこで労働をしているのではなく、むしろケアを受けているという考えがあるのかもしれない。しかし、2006年に導入された障害者自立支援法では、知的障害者施設の指導による利用者の一般企業への就職率や利用者への賃金の還元金などの実績が重視され、それによって知的障害者施設への援助金も決められる。したがって、障害者自立支援法によって、知的障害者の就職や彼らに対する賃金の保障が重視されてくるので、知的障害者の定年制については、今後、社会福祉関係者の間で論議が必要とされよう。

次に親達が定年制を必要としない理由として「働ける場所がなくなると困る」「働ける間は働く必要がある」ことを挙げていた。つまり、親達の意識のなかには、定年制により、知的障害者に仕事なくなると、彼らの毎日の老後生活をどのように過ごさせて良いのか分からないと言った不安があるのではないと思われる。一般社会においても、定年後の老後生活について、多くの人達は不安を持つ。ましてや、限定された生活空間の居住施設や在宅で積極的に余暇活動を過ごすことが難しい状況にある知的障害者の場合、定年後の充実した老後生活は、なお、一層、難しいことが予想される。したがって、高齢の知的障害者の定年制は就労問題だけでなく、老後生活と関連しており、彼らの充実した老後生活のためには、やはり、社会福祉関係者は、この定年制の問題も両親と検討することが必要とされよう。

高齢の知的障害者の生活場所や終焉場所の希望に関しては、多くの親達は「現在生活している場所」「グループホーム」「自宅」などで子ども達の支援を希望していた。つまり、親達は、子ども達の生活が変化することなく、制限されず、継続的な自由な生活の場で老後生活や人生の終焉場所を過ごして欲しいと考えていると思われる。特に、親達の年齢、知的障害者の年齢、知的障害者の日中の場所において有意差が見られたことから、親達や知的障害者の年齢が高くなると、現在の慣れた場所での老後生活や終焉場所を期待することが理解できよう。したがって、知的障害の高齢者は、現在、生活をしている場所（施設や在宅）や「グループホーム」で継続的に生活ができるような支援のためには、介護保険制度による福祉サービスを利用することも援助の1つの手段ではないと思われる。介護保険制度は、原則として65歳以上で要介護状態であることが認定されると介護保険サービスを受けることができる。高齢の知的障害者が介護サービスを受ける場合、それが施設サービス、あるいは在宅サービスであったとしても、彼らが心理的、身体的にも満足感

が得られるような介護サービスが必要とされよう。そのためには、高齢の知的障害者に対する綿密な介護計画と介護サービスを提供するホームヘルパー、特別養護老人ホーム、老人デイサービスセンターの知的障害者についての理解が重要となるであろう。そして、このような介護保険制度による福祉サービスに加えて、高齢の知的障害者が現在の生活の場で人生の終焉を迎えるためには、彼らに対する医療・保健・福祉の連携したサービスも重要であると考えられる。

引用文献

- 1) 牧野弘典：高齢精神薄弱者処遇の実態と展望，発達障害研究，9(1)：49-54, 1987.
- 2) 及川克紀，清水貞夫：高齢精神遅滞者の老化と施設ケアの問題，障害者問題研究，65：76-82, 1991.
- 3) 及川克紀，清水貞夫：高齢精神遅滞者の施設ケア，発達障害研究，14(3)：219-224, 1992.
- 4) 秦 安雄：精神薄弱者援護施設入所者の高齢化の実態と施設ケアの問題(1)，日本福祉大学研究紀要，92：25-39, 1995.
- 5) 山崎恭裕：障害者福祉施設における高齢者問題，障害者問題研究，27(3)：63-70, 1999.
- 6) 小笠原真佐子：いわゆる重症心身障害児(者)を持つ両親達の心理社会的状況について，ソーシャルワーク研究，4：217-224, 1978.
- 7) 新美明夫・植村勝彦：学齢期心身障害児をもつ父母のストレス—ストレスの背景要因—，特殊教育学研究，23-34, 1985.
- 8) 新美明夫・植村勝彦：学齢期心身障害児をもつ父母のストレス—代表事例による母親のストレス・パタンの分析—，特殊教育学研究，25：29-38, 1987.
- 9) 三浦 剛：在宅精神薄弱者の母親の主観的疲労感，社会福祉学，33：64-87, 1992.
- 10) ゲアレス・ハンゼン編集：障害者のいる家族，ドイツにおける精神遅滞者への治療理論と方法，三原博光訳，東京，岩崎学術出版社，52-72, 1996.
- 11) 大阪・草笛の家：高齢知的障害者の老人福祉施設利用についてその実態と意識調査，さぼーと，567：42-53, 2004.
- 12) Bleeksmā, M：Mit geistiger Behinderung alt werden, Beltz, 106-124, 1998.
- 13) 佐藤繭美：自閉症の人が経験した家族との死別，キリスト教社会福祉学研究，36：64-70, 2003.
- 14) 三原博光：わが国における両親達の意識調査，知的障害者ときょうだい，東京，学苑社，11, 112-136, 2000.

Parents Concerns with Regard to the Aging of Their Intellectually Disabled Children : By Means of a Questionnaire

Hiromitsu MIHARA*¹ Koji MATSUMOTO*² Hirokazu TOYAMA*³

*1 Department of Human Welfare Faculty of Health and Welfare,
Prefectural University of Hiroshima

*2 Yamaguchi Prefectural University

*3 Kinki Social Welfare University

Received 12 September 2006

Accepted 12 December 2006

Abstract

This paper investigates by means of a questionnaire the concerns of parents with regard to their intellectually disabled children, and 368 parents responded to the questionnaire. Although most of them were not elderly, falling within the age range of 20 to 30 years, the parents experienced anxiety with regard to their aging in the future. The reason for their anxiety stems from fears that, as they themselves age, they will no longer be able to care for their intellectually disabled children. But many parents do not expect the siblings to take care of the disabled child at a later stage. When asked about where they expected elderly people with intellectual disabilities to end their lives, the replies included " their own home" , " a group home" and " an institution for the intellectually disabled. " It seems that parents hope their children will end their lives in an environment that they are used to living in.

Key words : intellectual disability, aging, parents, old age, care of the elderly with intellectual disabilities.